

## 三木哲学論

看護教育における人間理解のために

木村千代子

日本大学大学院総合社会情報研究科

### A Consideration of MIKI Kiyoshi's Philosophy of 'Imagination'

– For a Better Understanding of Human Nature from a viewpoint of Nursing Education –

Chiyoko KIMURA

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

In his work *The Logic of Imagination and Formation*, Miki Kiyoshi is concerned with the questions of the building of human characters. He discusses how Art helps humans to cultivate themselves, and how moral persons and agents are formed. "Nursing education" plays a role of vocational training which aims at the acquisition of competence on the one hand. Yet on the other hand, since it is an "education," it is intimately connected with the formation of personality: its primary end is cultivation of humanity. Then how is *The Logic of Imagination*, especially the chapter of 'Art' (technē), theoretically connected with "nursing" and "education"? This is the main point in issue that the author wishes to establish in this essay.

---

#### ．はじめに

「2000年看護教育基礎調査」の概要によれば、少子化が進み看護系の学校でも、募集停止や廃校がきまっている学校が出てきていること、さらに「大学」以外の課程では学生の学力が低下してきていること<sup>1)</sup>が報告されている。また2002年の「新卒看護師の『看護基本技術』に関する実態調査」によれば、新卒看護師が看護師として自立していくのに必要な技術が十分に習得されていないことなどが報告<sup>2)3)</sup>されており、看護実践能力の低下がいわれている。

さらに、学生、新卒看護師の挨拶や接遇、言葉づかい、時間・約束を守る、身だしなみなど社会人としての基本的なことができていないことが指摘されている。看護は人間の健康に関わる仕事であるため、人間関係の形成、人間を理解することなしには業務の遂行は難しい。そして人としての生活を理解できずに日常生活の援助を行うことはできない。

また学生（青年後期）は、成長・発達的には成人への移行期で、自らの発達課題に向き合い、社会的自立を可能にしていく時期である。しかし心身に不均衡を生じ危機をはらむ時期でもあり、不登校、友達と仲良くなれないなどの問題を抱えている学生もいる。

少子・高齢、国民の意識の変化など社会状況により看護教育もさまざまな問題を抱えている。これらの問題は、単に個人や学校だけの問題でなく、その背後には個性の尊重とかゆとりの教育といっているが本当にひとりひとりが大切にされているのかなどの問いかけがあるのではないか。

ここで教育の目的とは何かを考える。

学校教育法において「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させる

ことを目的とする」(第52条)「短期大学は、深く専門の学芸を教授研究し、職業又は實際生活に必要な能力を育成することを目的とする」(第69条の2)と規定されている。また看護学教育の目的は、「確固たる倫理観に基づき、看護学に求められる社会的使命を有効に遂行し、生涯にわたり自己の資質の向上に努めることのできる看護専門職を育成する」(「看護学教育に関する基準」(大学基準協会))であり、看護職としての基本的知識や技術の修得のみではなく、論理的思考力と倫理的判断力及び創造性を育成し、保健、医療の進歩に即応しつつ、将来高度な知識・技術を有する専門職または教育者・研究者となるための基盤を培うことを重視している。

このように「専門職または教育者・研究者となるための基盤を培う」能力を育成するという大きな目的と共に、幅広く深い教養と総合的判断力を培い、豊かな人間性を涵養するという「人間としての人格形成」の大切な役割を担っている。

常に現実生きる人間の行為の本質を問い続けた哲学者三木清は、人間形成について次のように述べている。

「我々は我々の行為によって我々の人間を形成してゆくのである。人間は与えられたものでなく形成されるものである」(7・192)

さらに『構想力の論理』の中で次のように述べている。

「すべての行為は、広い意味においてものを作るという、即ち制作の意味を有している。構想力の論理は、そのような制作の論理である。一切の作られたものは形を具えている。行為するとは、ものに働きかけてものの形を変じ(transform)て新しい形を作ることである。形は作られたものとして歴史的なものであり、歴史的に変じてゆくものである。かような形は単に客観的なものでなく、客観的なものと主観的なものとの統一であり、イデーと実在との、存在と生成との、時間と空間との統一である。構想力の論理は歴史的な形の論理である」(8・7)

構想力の論理は「形の論理」であり、それはまた技術的制作的行為の論理である。人間の行為はすべて、なんらかの意味において制作であり、しかも技術を用いての制作である。教育の目的が人格形成であるとすれば、「看護専門職を育成する」教育とは何か。

学生は、学校という環境の中で教育され、そして多くの学生は、医療という環境の中で、「かけがえのないいのち」をもつ人間と接していくことになる。「教育」も「看護」も人間と向き合っていくことを旨としており、またどちらも行為者(実践者)としての人間のありように関わる問題である。そこで人格形成論としての『構想力の論理』『技術』を通路にして、「看護専門職を育成する」教育とは何かを、またこれからの医療を担っていこう人間を理解するための一つの方法として三木哲学を学んでいく。

## ・三木哲学と『構想力の論理』

### \* 歴史の過程と三木の思想形成

三木清は、昭和前期を代表する哲学者である。また西欧哲学史、思想史研究の先駆者であり、ハイデッガー、アリストテレス、パスカル、マルクス、ヘーゲル左派の研究をした。

三木清(1897 - 1945)は、1897年(明治30年)1月5日兵庫県に生れる。1914年(大正3年)17歳、第一高等学校入学。聖書や親鸞『歎異抄』などを繙く。1916年(大正5年)19歳、西田幾多郎『善の研究』に感動し、翌年京都帝国大学文学部哲学科入学、波多野精一に歴史哲学を学ぶ。

1922年(大正11年)25歳、ドイツに留学する。ハイデルベルクでリッケルトに師事し、歴史哲学の研究を続ける。1923年(大正12年)秋、ハイデッガーに師事するためマールブルグへ移る。1924年(大正13年)27歳、8月マールブルクからパリへ移った三木は、パスカルの『パンセ』を手にする。後に『読書遍歴』の中で「この書は私を捉えて離さなかった」(1・429)と書いている。

1925年(大正14年)28歳、帰国し唯物史観の研究にとりかかる。1926年(大正15年)29歳、処女作『パスカルに於ける人間の研究』出版。1927年(昭和2年)30歳で法政大学文学部哲学学科主任教授となる。「人間学のマルクス

的形態」などマルクス研究を発表。1930年（昭和5年）33歳、5月に治安維持法で検挙され豊多摩刑務所に11月まで拘留される。この年、大学教授を辞職する。

1932年（昭和7年）35歳、『歴史哲学』出版。1935年（昭和10年）38歳、『アリストテレス形而上学』出版。1936年（昭和11年）39歳、「西田哲学の性格について」を発表。1937年（昭和12年）40歳、「構想力の論理」を『思想』に連載開始、1939年（昭和14年）42歳、『構想力の論理 第一』出版、1940年（昭和15年）43歳、『哲学入門』刊行。1945年（昭和20年）48歳、治安維持法にて再び検挙される。9月26日、豊多摩刑務所内拘留所で獄死。日本は、この年8月15日敗戦を迎える。1946年（昭和21年）『構想力の論理 第二』が出版される。

## 1. 三木の規定する人間とは何か

三木が影響を受けたとされるのは西田幾多郎の『善の研究』、親鸞の『歎異抄』、そしてパスカルの『パンセ』である。1925年（大正14年）帰国後1926年（大正15年）29歳の時、処女作『パスカルに於ける人間の研究』を発表する。三木はどのように人間を規定していたのか。三木はパスカルを引用し人間について次のように述べている。

「パスカルに従えば、宇宙における人間の地位はまさに中間者ということである。我々の身体は宇宙の全体の裏にあってはさらに知覚し得ぬほどのものであるが、我々の到底達することのできぬ虚無にも等しき微塵子に対しては一の巨体、一の世界、寧ろ全体である。かくて自然に於ける人間は、『無限に比しては虚無であり、虚無に比しては全体である、それは無と全との間の中間者である。』けれども人間はまた他の意味においても中間者である。『人間は天使でもなければ獣でもない』というのはパスカルの有名な言葉である」（10・276）

「人間は自覚するとき彼の自然を彼の悲慘として理解する。けれどもこの自覚的意識そのものはまさに人間の『偉大』（grandeur）である。人間はかよわき葦にすぎない、しかし彼は『考える葦』である。

『空間によって、宇宙は私を恰もひとつの点の如くを含みそして呑む。意識によって、私は宇宙を含む』。人間の状態は疑いもなく悲慘である。然しながら彼の偉大さは悲慘が即ち偉大であり得るほど明瞭である。けだし彼の悲慘を悲慘として感じると云うことは唯自覚を有する人間にとってのみ許されたことである。……『人間の偉大さは彼が自己を惨めなものとして自覚するところに偉大である』。あらゆる被造物のうち人間が特に選ばれたものであるのは彼がみづから自己の悲慘を意識しているのに依るのである。……自然が単に自然なる存在であるに反して、人間は特に悲慘なる存在である。『人間のほかに惨めなるものはない』。そこに人間の特殊性と優越性があるとパスカルは考える。かようにして人間は悲慘であると共に偉大である。偉大と悲慘とは人間の『両重性』（duplicité）である」（1・125 - 126）

人間は広大な宇宙に浮かんでいる「かよわき葦にすぎない」しかし「考える葦」であるとし、三木は人間を「無限と虚無」「偉大と悲慘」との中間者と規定している。

## 2. 三木哲学と社会的背景

三木の生きた時代は戦争の時代であった。高等学校時代を通じて第一次世界大戦が続いていた。また大学を卒業した年（1919年、大正9年）は、日本が「未曾有の大恐慌に見舞われた年」である。そして1922年（大正11年）ドイツに留学し、1924年（大正13年）マールブルクからパリへ移り、1925年（大正14年）帰国。

その後1927年（昭和2年）3月金融恐慌勃発に始まり、1930年代は、1931年（昭和6年）の満州事変、1933年（昭和8年）1月ヒトラー内閣成立・5月京大淹川事件、1936年（昭和11年）2・26事件、1937年（昭和12年）日中戦争勃発、1941年（昭和16年）第二次世界大戦が起るなど次々と情勢が変化した時代である。

唐木は、当時の社会的背景について次のように述べている。

「大正末期から昭和初年へかけての日本の現実の社会は、資本主義社会機構の行詰りをことごとくに具現し、人間は極度に非人間化され、またその結果として自己の非人間化を意識せざるをえぬ階級の自覚を呼びさましつづあった。三木さんが観念世界において求めてやまなかった個性の自由と自律、人格と理性の支配する世界は現実にはどこにも存在しえないような時代と社会であった」<sup>4)</sup>

三木は昭和8年に発表された「不安の思想とその超克」において次のように述べている。

「日本においても昨年あたりからインテリゲンチヤの精神的状況にかなり著しい変化が現われてきたのではなからうか。……満州事変後の影響によってインテリゲンチヤの間に醸し出されつつある精神的雰囲気はほかならぬ『不安』である」(10・286)

そしてさらに「社会的不安は精神的不安となり、しかも『内面化』される。……『精神的』危機である」(10・290)

「不安の思想の超克のためには人間に値する新しい人間の定義が与えられねばならぬ」(10・304)

「タイプはロゴスの意識とパトスの意識との統一の上に立つものであると言い換えることができるであろう。そこでは客体的な現実性と主体的な真実性とが相寄って、互いに強め合い、高め合う。かかるものであるから、タイプは生きたものとして我々の目前につねに現われ、我々の生活を慰め、励まし、深め、力づけるのである」(10・309)

このように次々と社会情勢が変化していく中で人間は「精神的」危機にさらされる。「不安」の中から「人間に値する新しい人間のタイプ」を思索していくことになる。ここに『構想力の論理』の胎胚をみることができる。

唐木は、三木が「人間を中間者として規定し、中間者の哲学としての構想力の論理を樹立しようとしたのは、悪と誤謬のなかから善と真実を求めてやまない心の具現であった」<sup>5)</sup>と述べている。

三木哲学は、第一次世界敗戦直後のドイツに留学し、当時の社会、精神面で不安の体験をしたこと、自らが不安の思想家に傾き、虚無の哲学の系列に接したこと、またパスカルとの邂逅。そして自らが生きた時代は戦争の時代であった。次々と情勢が変化していく中で精神的危機に陥った人間は、不安と虚無の中から「形のないもの」から「形をつくる」哲学、自己を形成する哲学に行きつくことになる。

自己を形成する哲学『構想力の論理』は神話・制度・技術・経験とすすんで、言語(言葉)でしめくられる予定であった。<sup>6)</sup>以下人格形成論として『構想力の論理』第3章「技術」を分析していく。

## ・ 技術

三木の論理を辿りながら、技術とは何か、その本質、基本的性格について考察する。

### 1. 「技術」とは何か

「技術という語は、最も広い意味に用いられる場合、一定の目的を達するためのすべての手練、すべての手段、手段のすべての結合、すべての体系を意味している」(8・185)

「固有な意味における技術を経済的技術と見る場合、道具は機械的道具に限定されるが、広い意味においては身体の諸部分、即ち有機的器官、身体そのものも道具と考えられ、更に全自然も人間にとって身体の意味を有し、従って道具であると考えられるであろう」(8・186 - 187)

「近代科学が出て来る迄の技術は、東洋であると

西洋であるを問わず、一般的にいえば道具の技術である。これに反して近代の技術は機械の技術である。道具の技術は或る有機的なものであるが、機械の技術は全く機械的なものである」(14・523)

技術は一定の目的を達するためのすべての手練、すべての手段、手段のすべての結合、すべての体系を意味している。根本的な意味において、道具の技術であり、広い意味においては人間の各器官や人間の身体そのものが道具と考えられ、更にあらゆる自然も道具であると考えられる。

戸坂は技術について次のように述べている。

「技術の主観的・個人主体的・な存在様式として、この場合技術は一般に技能又は能力を意味する。…手こそ原始的人類の物質的・精神的発達において決定的な役割に与っていた処のものである。だから技術が仮りに手先の技術能力につきるとしても、それだけで同時に技術は単なる手先の事柄ではないことになる。……技術は同時に知能(インテリゲンツ)にぞくするものでなければならない。……技術とは主観的存在様式からいえば、一つの勝義における知能なのである。技術は元来物質的技術であり、物質的技術の主観的存在様式としての技術が知能である。……技術が一つの知能であり、又逆に知能が一つの技能であり、その限り技術性を有っている」<sup>7)</sup>

戸坂は技術の主観的・個人主体的・な存在様式として、技術は一般に技能又は能力を意味することを挙げ、手こそ原始的人類の物質的・精神的発達において重要な役割を担っていると述べている。

それでは、身体の一部も道具とすれば手のもつ意味とは何か、三木は次のように述べている。

「技術の存在には知性が必要である。手の成立は知性の発達を離れて考えられない。……手は身体の一部として他の器官に比して普遍性の性格をもっている。手は身体の一部の如く特定の活動に縛られ

ないで、多様な、広範囲の活動に適している。手は謂わば中立的である。……人間は理性によって道具を有し、その活動は媒介されたものである。……かようなものとして道具は主体と客体とを媒介する。主体と客体とを媒介するというのがあらゆる制作的活動の本質であり、かかる制作的活動は凡て道具的であり、従って技術的である」(18・299 - 300)

「技能は道具をもつことによって現実的に技能であり、技術であり得るのである。他方道具も知能と結び附くことによって現実的に道具であり、技術的なものであり得る。道具は単に客観的なものでなく、むしろ人間の知能或いは技能の客観化されたものである」(7・215)

戸坂も知能は一つの技能であり、その限り技術性を有っていると述べ、三木においても技術の存在には知性が必要であると述べている。人間は理性によって道具を有し、その活動は媒介されたものである。この場合道具は単に客観的なものでなく、むしろ人間の知能或いは技能の客観化されたものである。このように手は主体と客体とを媒介するものであり、そこには「理性をもつ人間そのもの」が宿る。それは制作的活動の本質である。

## 2. 道具と技術

三木はまた、エピナスを引用し次のように述べている。

「驚くべきことには、道具は、機械でさえも、工人をば、彼の手段によって実現された目的について、また特に新しい欲望を満足させるために経験に照らして彼の手練を無限に変えるという人間の有する能力について、明瞭に意識するようにつねに強制しないのである。道具は工人と一つになっている、それは身体の一部の連続であり、このものの外部における投影である。工人はそれを延長された肢体の如く使い、その構造に注意したり、その種々の部分が如何にしてその目的にかくもよく適合しているかを探求したりすることを殆ど全く考えないのである。そ

の助けによって得られた労働は従ってなお自然的と見ることができる」(8・222)

「発明された道具が無意識的に使用されるということは、技術の経験主義に基くというよりもむしろ根本的には技術の制度的性質に基いている。技術は習慣的になることによって技術の意味を有するのであり、かように習慣的になることによって道具は身体の一部となり、その労働は自然的となり得るのである。技術の進歩が非連続的である」(8・224 225)

「技術のうち根本的な意味における技術が道具を作る技術であるとすれば、技術の本質はかように主体と客体とを媒介することでなければならぬ。技術において、人間的なものは物的になり、また物体は人間的にされる」(8・226)

このように根本的な意味における技術が道具を作る技術であるとすれば、その場合、道具は一定の目的を達するためのすべての手練、すべての手段を意味しており、物的生産のための手段として使われてきた。たとえば道具は、身体の器官の連続であるかの如く工人と一つになっており、まさに工人はそれを延長された自分の肢体のように無意識に使っているように見える。このように発明された道具が無意識的に使用されるということは、技術の制度的性質に基いている。習慣的になることによって身体の一部となり、その労働は自然的となり得る。技術は客観的なものと主観的なものと、ロゴス的なものとパトス的なものととの総合である。それは一定の技術的な形において実現されるのである。技術によって作られたものはすべて形を有している。道具は器官の無意識的な投影、延長された身体として主体に属している。道具は主体的であると同時に客観的である。

高桑は三木の議論を敷衍しながら、次のように述べている。

「目的を達成するために手段を用いる能力は技術的であるといわれる。技術の本質を抽象的にいえば、

客観からの働きかけに対して主観客観的な主体が自ら客観を我物としてそこに自己を新たに形成することだといえる。つまり、知性と身体 of 統一体たる主体は、客観からの働きかけに対して自己の客観たる身体を形成し適応的な主体となるという意味である。従って主体は技術的に身体を使用し客観を変革しつつ、身体をも変革して真の主体となることができるともいえよう。しかし知性が技術的であるといわれるのは、かような身体を手段とする場合よりも、身体やその器官とは明瞭に区別される『道具』を作りこれを身体 of 延長として使用する場合に就いてである」<sup>8)</sup>

さらに技術の本質について三木は次のように述べている。

「技術の本質は発明にあるといわれている。……『発明』は『発見』と区別される。発見というのは discover、entdecken、decouvrir という文字が表わしているように、覆っているものを取り除くこと、隠れていたもの、知られなかったものを見出すことを意味している。……これに反し発明というのは新しいもの、嘗て存在しなかったものを作り出すことを意味している。……発明は物を存在せしめるのに対して発見は物を認識せしめるという区別がある。即ち発明は創造であり、発見は顕示である」(8・238)

「発明と模倣とは技術の本性に、更に構想力そのものの本性に属している。技術は言うまでもなく発明である。しかしそれのみでなく、技術はつねに自己自身を模倣する傾向を具えている、言い換えると技術は繰返される、技術は習慣的になることによって技術の意味を有するのである」(8・255)

技術の本質は、新しいもの、これまで存在しなかったものを作り出すことを意味する発明(創造)と、自己自身を形成していく模倣がある。技術は繰返され、習慣的になることによって技術的となり、一定の形を生産する。このように技術は道具の発明だけではなく、自己自身を模倣する性質をもっている。

### 3. 人間の技術

三枝博音は技術について「人間のわざにしても自然のわざにしても、技術は形像をえがくことによって成りたっている」<sup>9)</sup>と述べている。

三木は「形の哲学は技術の概念を根底とすることによって行為の哲学となることができる」(10・447)とし、「技術」を「行為の形」として規定した。(7・211)

さらに、アリストテレスの『自然学』第二巻第八章における言葉を引用し、次のように述べている。

「『およそ技術は一方において自然が仕遂げ得ないことを完成し、他方において自然を模倣する』……自然は或る意味では技術の模範である。……人間の技術は自然のうちにない新しい形、意味、価値を形成することによって文化と呼ばれるものを形成するのである」(7・255 256)

「人間の技術があるばかりでなく、『自然の技術』がある。自然も形成的なものとして技術的であり、人間の技術は自然の技術を継ぐということができる。人間の技術にしても、物的技術があるばかりでなく、人格的技術がある。ひとが他の人間を形成してゆく教育の如き場合はもとより、自己自身を、自己の身体をも自己の精神をも、形成してゆく場合にも、技術がある」(7・23)

「技術は物を作ることによって人間を作る。我々は物を作ることによって自己を作ってゆくのである。技術は人間形成的意義をもっている。技術は知識と活動との総合であり、人間の力をこの二つの面に向って同様に要求しつつ全体的人間の形成に役立ち得るであろう。しかも技術は元来社会的なものであり、その人間形成は社会的人間形成でなければならぬ」(7・286)

人間の技術には、物的技術だけでなく、人格的技

術(=自己形成の技術)がある。人格的技術には、ひとが他の人間を形成してゆく教育のような場合と人間が自己自身を形成してゆく技術がある。人間の技術は、自然が成し遂げ得ないことを完成することによって自己自身を作ってゆくのである。このように技術は人間形成的意義をもっているといえる。さらに人間形成には知識と活動の二面が必要であり、その総合された技術をもって働きかけていく。それは社会的人間形成でなければならない。

そして習慣について次のように述べている。

「習慣は一つの技術である。技術は主観と客観との、人間と環境との統一を意味している。すべての習慣が技術的であるように、すべての技術には習慣的なところがある。技術における熟練とは習慣的になることであり、熟練されていない技術は真に技術的であるとは云い得ないであろう。かくしてデューイの云う如く『習慣は環境的力と人間的能力との作業的適応』working adaptation である。……習慣は持続的な適応として一つの均衡を意味している」(8・165)

そして人間と環境との適応とは何か、三木は次のように述べている。

「習慣は環境に対する適応であると同時に自己自身に対する適応である。それ故に習慣における技術は外的技術であると共に内的技術でなければならぬ。後者は何よりも精神と身体との均衡に関わっている。……人間の身体と精神とは内的技術によって連関させられているのであり、この技術は構想力を基礎としているのである」(8・172)

三木は「習慣は環境的力と人間的能力との作業的適応」であるというデューイの言葉を引用して、「習慣は一つの技術」と規定した。技術は「主観と客観との、人間と環境との統一」を意味している。習慣は環境に対する適応であると同時に自己自身に対する適応である。それは「一つの均衡」を意味してい

る。均衡の意味とは「人間と環境との均衡」であり、それは単に「環境に対する適応」だけでなく、この均衡は「自己自身に対する適応」であり、「精神と身体との全体的」な均衡として実現されるところに存する。このように習慣における技術は「外的技術」であると共に「内的技術」である。人間は技術によって新しい環境を作りつつ自己を新たにするのである。環境を変化することによって環境に適応するという人間の能動性は知性によって発揮される。

以上要するに、構想力の論理は、「形の論理」であり、それは技術的制作的行為である。人間の行為はすべて、なんらかの意味において制作であり、しかも技術を用いての制作である。

それでは、教育の目的が人格形成であるとすれば、「看護専門職を育成する」教育とは何か、「人間として」の教育とは何か。三木の人格形成論から探求していくこととする。

## ・看護の向かうところ

医療技術の進歩や国民の意識の変化など社会状況により看護の質が問われる時代となってきた。看護が問題とするのは、人間の健康についてである。

三木は人間について次のように述べている。

「人間は内的にして外的な、或は主体的にして客体的な存在である。行為的自覚の立場にして初めてかかる人間を全体として捉え得る」(18・147)。

三木は、このように身体的精神的社会的な全体として人間存在を捉える。

三木はさらに健康について次のように述べている。

「健康は全く銘々のものである。それが全く個性的なものである。健康の問題は人間的自然の問題である。というのは、それは単なる身体の問題ではな

いということである。健康には身体の体操と共に精神の体操が必要である。……自然に従えというのが健康法の公理である。……自然に従うというのは自然を模倣するということである。……その利益は、無用の不安を除いて安心を与えるという道德的效果にある」(1・289 - 302)

看護の目的は、あらゆる健康状態にある人の「人間的自然の問題」について査定し、その人がその人らしく、よりよい生活ができるように働きかけていくことである。

人間の価値について岩崎は「人間のひとりひとりの生命は一度死んでしまえば、けっして二度とつくりだすことのできるものではない。ひとりひとりの人間は、この意味で、絶対にかけがえのないものである」<sup>10)</sup>と述べている。

このように「かけがえのないいのち」をもつ全的な人間に向かうとき、どのような姿勢が要請されるのか。高橋は次のように述べている。

「私達看護婦は、キュアがすべてなくなったとしても、そこにはやわらげられる、慰める、安らぎを与える、支える、といったケアが最後まであることを見失ってはならないと思います。」<sup>11)</sup>と述べている。

さらにクーゼは、看護の語源について次のように述べている。

「『看護 nursing』という語は、『養う nourish』という語から派生したもので、そもそもは『食物を与えて養う、あるいは乳を飲ませる』という意味のラテン語“nutrire”を語源としている。現在でも、『看護する nurse』という動詞を辞書で引くとまず出てくるのが『母乳で栄養を与える suckle』という意味である。」<sup>12)</sup>と述べている。

また野島は、「人間の赤ん坊は……独りで生きることとはできない。母親がその腕に抱き上げて哺乳し、養い育てなければならぬのである。ここに看



護の語源としての nursing の意味がある」<sup>13)</sup>と述べている。

このように「かけがえのないいのち」をみつめる母親のまなざしが看護の原風景である。「かけがえのないいのち」を有する全人的な人間に対して、一つの行為を行うとき、心配したり、気づかったり、世話をするといったような誰かに何かをするときの看護師の姿勢や態度が重要な意味を持つといえる。

今日、医療技術の進歩により新たな倫理問題が発生するようになり、医療における意思決定の基準となる基本的な倫理原則や価値が問い直されるようになった。さらにこれまでの意思決定者としての医師の役割が問い直されることになった。と同時に看護師自身も倫理的な判断が問われるようになってきた。

三木は責任について次のように述べている。

「責任をもつというのは他の信頼に報いることであり、……信頼と同じく責任の観念は道徳的行為の基礎である。……他に対して責任を負うことが同時に自己に対して責任を負うことであり、自己に対して責任を負うことが同時に他に対して責任を負うことであるところに、人間のまことがあるのである。そして人格の観念と責任の観念とは本質的に結び付いている」(7・162)

そして「道徳的行為の目的は善である」(7・184)と明言している。

フライは「責務とはどのように責任を遂行することができるかを答えられること、と定義することができる」<sup>14)</sup>としている。

そこでは看護師がケアを行っていく上で自らの専門的知識と技術、教育、経験を基礎に何が善かを判断し、実践する能力が要求される。さらに自らのケアに責任をとる必要がある。と同時に看護師一人一人の人間としての資質が問われる。そのため看護教育の質と実践の場にやってくる新卒看護師の能力に

対して看護教育者は、重要な責任を持っているといえる。

## ・看護教育における人間形成とは

人格的技術には、ひとが他の人間を形成していく教育をさす場合と身体と精神をもつ自己自身を形成してゆく技術がある。このように「ひとが他の人間を形成していく」技術と「自己自身を形成していく」技術について考察していく。

### 1. 「ひとが他の人間を形成していく」技術

三木は、「教育は技術として自然の欠けているものを満たすことによって自然を完成する。併しその際教育は自然に従い自然を模倣する。教育は人間性の理解の上に立って人間性の完成を目的としなければならぬ」(9・192 - 193)と述べている。

看護教育機関には、大学、短期大学、専門学校、高校専攻科などがある。森田は、「現任教育計画を組む時、卒業してきた学校によって習得してきたことが異なるのも問題で、看護計画同様個別性を重視して指導計画をたてなければならない」、そして「看護婦を育成するこの複雑なる教育制度がもっと単純にならないものか、学校による差が縮まらないものかと願わずにはいられないのもまた現実である」<sup>15)</sup>と看護教育の現状について述べている。

1999年、看護系大学協議会は「21世紀に向けての看護職の教育に関する声明」を打ち出し、4年制大学では professional education を、短期大学や専門学校では occupational education を目指すことを明示した。4年制大学の看護教育は“技術の熟練ではなく、考えるナース”を、短期大学や専門学校では“現場で役立つ実践的な看護のできるナース”をそれぞれ育成することが目的であるとしている<sup>16)</sup>。

学制の差異にかかわらず看護教育を受けた者は、国家資格によって「看護師」として認められており、「かけがえのないいのち」をもつ一人の人間に対し

て安全な医療を「提供していくこと」においては一つである。

しかし「かけがえのないいのちをもつ」人間に安全な医療が「提供できるか」という専門職としての評価が問われてくるのも事実である。

三木は経験について次のように述べている。

「経験とは独立な存在と存在との関係である。独立なものとは独立なものとの関係にして真の関係であり、それらのものは一つの世界においてあることによって関係することができる。経験は独立なものとは独立なものとのいわば出会いである。」(8・263)

さらに経験は主体と環境との動的な行為的な関係として成立していると言う。

「行為と環境とは不可分の関係にある。環境が行為を作り、行為が環境を作り、両者は一つに結び附いている。かようにして我々の行為は成全的行動 integrative behavior といわれる。成全とは二つの活動即ち主体の活動と環境の活動が関係することの間に於ける結合であり、この結合は機械的でなく創造的結合であって、そのさい価値が創造されるのである」(8・267)

経験とは「独立な存在と存在との関係」であり、出会いである。専門職者として働くということは、そこには、「独立な存在と存在との関係」がある。人間と人間との関係が成立しえないと相互に認識すること、人間を理解することが出来ない。看護も教育も人間を支援する行為であり、社会の中で行われるものである。形は主体と環境との適応の関係からつくられるものであるから環境を抜きには考えられない。すなわち環境は人間形成に影響を与える。ここでは「どのように相手と向き合うべきか」という姿勢・態度が重要な意味を持つといえる。

三木は次のように述べている。

「役割における人間として我々は有能でなければ

ならず、人格として我々は良心的でなければならぬ。しかも二つのことは対立でありながら統一である」(7・180)

専門職としての評価において、専門的知識・技術の習得は、教育によって、また本人の意識によって向上していく。しかし「かけがえのないいのち」をもつ一人の人間が「かけがえのないいのち」をもつ一人の人間に対して、道徳的な基準をもって行為することができるか、人間を尊重することができるかの姿勢・態度は、すぐには形成されない。

専門職者として、ひとりの人格をもった人間として、それぞれがそれぞれの役割において有能であり、また人間として良心的であることが望まれる。

## 2. 「自己自身を形成していく技術」

三木は「教育は為すことによって、練習によって行われる。然るに人間は為すことを繰返すことによって習慣を得る。行為は習慣によって固められ、只一度切りのものでなく、性格的なものとなる。習慣は教育の基礎である」と述べている。(9・194、また『ニコマコス倫理学』第二巻、第一章)

さらにまた、習慣について彼はこう言う。習慣は第一の自然＝本能にとってかわる、作られた自然＝「第二の自然」である、と。そしてアリストテレスとともに、「習慣は最初の行為と共に始まる」との理由から、「すべての行為は始まりつつある習慣と見倣することができる」(8・112 - 113)と性格づけている。

三木はデューイを引用し「習慣は一つの技術」であるとした。習慣は環境に対する適応であると同時に自己自身に対する適応である。それは「人間と環境との均衡」であり、単に「環境に対する適応」だけでなく、この均衡は「自己自身に対する適応」であり、「精神と身体との全体的」な均衡として実現されるとしている。習慣における技術は「外的技術」であると共に「内的技術」である。そして習慣は内

的自発性を有するものであり、持続することによって自己自身を形成する。

学制の差異があっても専門的知識・技術の習得は、教育的環境を整えることによって可能である。しかし教育的環境が整っていたとしても、習慣は内的自発性を有するものであり、自己自身の意識を向上させるための「自己自身に対する適応」(精神と身体との全体的な均衡)がうまく働かないと専門的知識・技術の習得は難しい。

また「人間と人間との関係」において挨拶・言葉は、人間を理解する上で重要な要素となる。挨拶について三木は次のように述べている。

「例えば、我々は人に会ったときお辞儀をする。挨拶は一つの擬制であり、一つの制度である。……挨拶の仕方は種々の民族のおいて種々に異なっている、……ただ或る一定の具体的な表現としてのみ挨拶は挨拶の意味を有するのである。また挨拶のうちに表現されるものは理知的なものというよりも情意的なもの、即ち服従、親愛等の意志や感情である。……それは一つの擬制として知性の産物でなければならぬ。……挨拶は本能的なものであるとも考えられるが、しかし挨拶は礼儀として寧ろ擬制をもって本能に替えるという意味を有している。簡単に云えば、種々なる挨拶の形式は……まさに構想力に属する。……お辞儀をするとか握手をするとかいう挨拶の形式は……社会的関係によって規定され、かような社会的関係を表現する。……もとよりそれは本能的なものでなくて擬制的なものである。しかも或る一定の具体的な形式を有する挨拶は単なる知性の産物でなく、却って構想力の産物である。」(8・108)

挨拶は「社会的関係を表現」する「具体的な表現」であり、それは「意志や感情」を現わす。挨拶は「知性の産物」である。しかも単なる知性の産物でなく、「情意的なもの」に基いた「構想力の産物」である。

さらに挨拶、言葉について述べている。

「人と人が挨拶を交わすとき、その言葉はすでに技術的に作られたものである。挨拶は修辞学的であり、修辞学は言葉の技術である。そのとき、彼等が帽子をとるとすれば、そこにまたすでに一つの技術がある。一般に礼儀作法というものは技術に属している。技術的であることによって人間の行為は表現的になる。礼儀作法は道徳に属すると考えられているように、すべての道徳的行為は技術とつながっている。礼儀作法は一つの文化と見られるが、一切の文化は技術的に作られ、主体と主体との行為的連関を媒介するのである」(7・174)

「言葉は人間存在の社会性の基礎であると共にその個性の基礎である」(5・156)

「修辞学は各人のパトス、またエートスによって規定され、性格的なものである」(5・147)

「言語はつねに意味を含むものである。言語は内と外との一致として表現的である。また言語は独立なものとしてそれ自身に於て身体と精神とを持っている」(18・312 - 317)

このように挨拶は「社会的関係を表現」する礼儀作法であり、道徳的行為である。それは人との関係を具体的に表現する技術であると共に、知性をもって意志や感情を表現する「身体と精神との全体的均衡」(内的技術)が影響を与える。毎日の生活のことであるから、人格形成にも大きく影響する。それは「独立な主体と主体」の関係を築くために、またこの関係がうまく築けないと人間を理解することは難しい。毎日の積み重ねが形をつくるといえる。

## ・今後に向けて

内田は「構想力論」で次のように述べている。

「三木は人間の究極目標とはなにかを問いました。道徳的人間になること、そのためには、同時に社会

が道徳的社会に脱皮しなければならないと考えた。道徳的社会の基礎は、個々人の固有の生活行為（生きること）が根源的に承認されるという根本条件にあり、個性的生活にある……。個性的生活とは……。よい作品を創る行為こそ個性を培い、他者の作品を深く評価できる基準をもたらすと考えました」<sup>17)</sup>

三木は次のように述べている

「人間の目的は文化にあるのではなく、文化の目的が道徳的存在としての人間にあるのである。文化的合目的性は究極において道徳的合目的性である。それは人間の道徳的自覚において成立する」(8・492)

さらに三木は「ひとがその仕事において忠実であること、良心的であることは、道徳的であるといわれる。そのとき問題にされているのは、彼の仕事でなく、彼の人間である」(7・173)と述べている。

「複雑なる教育制度」の中で教育を受けている学生達は、これからの医療を担っていく人達である。国民が求めているのは、安全に、そして安心して医療が受けられること、そして人間として尊重されることである。「教育」も「看護」もどちらも人間のありように関わる問題である。「複雑なる教育制度」の中で教育を受け、「かけがえのないいのち」をもった人間と向きあうことにおいては一つである。そこでは単に専門的知識と技術的能力が問われるのではなく、専門職者としてのそれぞれの役割における有能さと一人の人間としての人間性が問われる。

専門的能力は、職場についてからでも自分の意欲次第で磨くことができる。しかしそれぞれの役割において、また人間として、「有能と良心との統一された人格の形成」は、日々の積み重ねの所産である。人間は自然的なもの、自己自身のうちに運動の原理を有するものである。

「教育の対象をなす人間は自然的なもの、生成し生長するもの、自己自身のうちに運動の原理を有するものである。教育はこの人間に働きかける」(9・

188)

このように「生成し生長するもの」に対して行動の変容を期待して働きかける。人間の究極目標は、道徳的人間になることである。人間は環境との関わりの中で生きている。「有能と良心との統一された人格の形成」のためには、生成し生長するものの可能性に期待し、人間ひとりひとりを大切にしていけることが課題である。

三木は人間を中間者として規定し、矛盾に充ちた存在であるとしている。そして自らが困難な生きにくい社会の中であって、人間は何をよりどころにすれば良いかを思索し続けた。人間の行為はつねに環境における行為である。そして環境を形成してゆくことは同時に自己を形成してゆくことである。我々は社会の中で生きていくことによって自己の人間を作ることができるのである。

## 凡 例

1. 三木のテキストは、『三木清全集』岩波書店、1966 - 1968 を使用した。引用は下記の諸巻による。

第一巻『パスカルに於ける人間の研究』『人生論ノート』

第五巻「哲学諸論稿」

第七巻『哲学入門』『技術哲学』

第八巻『構想力の論理』

第九巻『アリストテレス』(1929・昭和四年)、『アリストテレス形而上学』『アリストテレス』(1938・昭和十三年)、『ソクラテス』

第十巻「哲学評論」

第十四巻「評論 教養と文化(二)」

第十八巻『語られざる哲学』『手記』『哲学的人間学』『親鸞』

2. 三木全集からの引用箇所は(巻、ページ)のみを記し、本文中の引用の直後に示した。

例:「ヴァレリイが convention と称するものは普通に慣習といわれるもののみでなく、道徳もしくは習俗、法律、政治、言語、芸術、社会そのも

のに至るまで包括する」(8・101)  
全集第八巻、101 ページからの引用であることを示す。

3. 本文中のギリシア語は省略した。
4. 旧かなづかいは、すべて新かなづかいになおした。
5. 「看護婦」は、平成 14 年 3 月 1 日より「看護師」と名称変更されたが、本論文中、引用箇所においては「看護婦」のままとした。

## 注

- 1) 藤田和夫：「2000 年看護教育基礎調査」の概要、看護、53(11) 2001、p.82 - 83 .
- 2) 國井浩子：「新卒看護師の『看護基本技術に関する調査』に関する中間報告」、看護、55(3) 2003、p.22 - 23 .
- 3) 佐藤エキ子：「新卒看護師の“看護基本技術”をめぐって、看護、55(8) 2003、p.34 - 35 .
- 4) 唐木順三：『三木清』、筑摩書房、1947、p.68 .
- 5) 同上、p.53 .
- 6) 三木清：内田弘編：『三木清エッセンス』、こぶし書房、2000、p.338 .
- 7) 戸坂潤：『戸坂潤全集』第一巻、勁草書房、1973、p.236 - 237 .
- 8) 高桑純夫：『三木哲学』、夏目書店、1946、p.98 - 99 .
- 9) 三枝博音：『技術の哲学』(POD 版)、岩波書店、2000、p.252 .
- 10) 岩崎武雄：『哲学のすすめ』、講談社、初版 1966、1999、p.186 .
- 11) 高橋シュン：『看護行為を支えるもの』、日本看護協会出版会、1987、p.73 .
- 12) ヘルガ・クーゼ：竹内徹、村上弥生監訳：『ケアリング』、メディカ出版、2000、p.19 .
- 13) 野島良子：『看護論』、へるす出版、1997、p.2 - 3 .
- 14) サラ T. フライ：片田範子・山本あい子訳：『看護実践の倫理』日本看護協会出版会、1998、p.41 .

15) 森田孝子：「臨床看護の現場から基礎教育への提言」、Quality Nursing、3(1) 1997、p.47 .

16) 日本看護系大学協議会：「21 世紀に向けての看護職の教育に関する声明」、1999、6 . 30 .  
<http://janpu.umin.ac.jp/announcement.html>

17) 内田弘：「三木清の構想力論」、専修大学社会科学研究所『社会科学年報』第 32 号、1998、p.413 .